



人間牧場主・年輪塾々長
若松 進一

移住あれこれ

私は長年地域づくりに関わっていることもあって、松山などで出会う人から「空き家はないか?」とか、「夕日や海が見える土地があったら紹介して欲しい」とよく頼まれました。聞けばその殆どの目的は、いわば贅沢なセカンドハウスや、アウトドアな遊びの場として活用することでした。ゆえに左程深刻でもなく、「まあ考えておきましょう」程度で、その場を取り繕っていました。

ところがつい最近の問い合わせは、そんな単純なものではなく、人生をやり直そうと決意したり、脱サラして田舎で暮らしたいというような、真剣かつ深刻な相談が多いようです。加えて日本全体が人口減少時代に突入し、とりわけ地方の過疎化、高齢化、少子化による活力の低下や閉塞感を目を覆うばかりで、このままだと潰れてしまうのではないかと危惧され、国も地方自治体も定住人口を増や

さなければと、重い腰を上げざるを得なくなり、何かにつけて「移住」という言葉をよく耳にするようになってきたのです。

今都会から田舎へ人を呼び込む移住促進は戦国時代を迎えていて、都会で開く移住促進フェアには、どの自治体もあらん限りの知恵と金を出し、躍起になって誘致合戦を繰り広げているようで、「移住したら〇〇を差し上げます」という特典や、甘い言葉に吊られて都会に住む人たちの中には、ある種の期待感を持ってフェアの会場を渡り歩いている人も多いようです。

私の町で移住を本格的に考え始めたのは、翠小学校の子どもの数がこのままの推計で行くと減り続け、学校が廃校になるかも知れないという危機感からでした。学校の廃校は地域そのものが活力を失うことを意味するだけに、みんなであえず合併したメリットを生かし、校区を外して生徒を市内全体から募集してもらうよう行政に働きかけました。不安だらけの船出でしたが、幸い翠小学校は県内最古の現役木造校舎で、環境省のエコ改修で整備がなされていたことや、ホテル保護活動も軌道に乗ってある程度注目を集めていたので、少しずつ校区外入学

を希望する子どもたちがやって来るようになりました。

西宮から伊予市に引越して来ていた長谷波さん一家も、そのことを聞きつけ翠小学校を見学し、二人の子どもも翠小学校がいつべんで好きになり、一年間列車で通ってくれました。西宮や隣り町の学校に通っていた頃の子どもの姿とは、まるで別人のように活き活きして活動する、わが子の姿を目の当たりにした長谷波さん夫婦は、子どもたちに本当のふるさとを与えてやりたいと、真剣に移住を考えるようになりました。学校活動で知り合った同年代のPTAの皆さんと打ち解けてそのことを話し、偶然にも双海町粒野の民家空き家が見つかりました。奥さんは松山の病院で看護師、ご主人は調理師、しかも空き家から学校までは歩いて5kmも通学しなければならぬのです。加えて三人目の子どもが二歳という、まるで家族バラバラな繋ぎ合わせにくい環境にありましたが、一番下の子どもが大きくなるまでご主人が、主婦ならぬ主夫となることを決意し移住をしてきたのです。田舎は「男は外、女は内」という封建的な考えの人が多く、最初は理解されにくかったようですが、ご主人のポジティブな生き方に共感する人も多く、今では温かい雰囲気の家を作っています。



双海町での暮らしを堪能する長谷波さん一家

す。二人の子どもが通う学校は僅か十五人の小規模校ゆえ、一人ひとりの子どもに陽が当たる温かい環境に生まれ、学校では勿論のこと、私がお世話している子ども体験塾にも休むことなく参加して、まるで水を得た魚のように活発に泳ぎまわっているのです。

そんな折、地域おこし協力隊の本多さんが移住促進を主なテーマに赴任して来ました。まちづくり学校双海人が中心になって翠小学校区に移住促進協議会が設立され、その成果は少しずつ花開き、日尾野のWさん一家五人、日尾野のKさん一家四人、大栄のOさん一家四人、本多

さん一家四人に、粒野の長谷波さん一家五人を含めると、五家族二十二人も人が移り住み、今年の夏ごろ久保へ移住予定のIさん一家六人を含めると子どもの数も十六人にまで増えるのですから驚きです。

田舎は自然が豊かだとか言うけれど、自然の豊かな所は日本全国何処にでもある中で、移住者は何故双海町や翠地区を選んだのか、全ての人には聞いていませんが、長谷波さんの話によると結局行き着くところ人の存在のようでした。四十二歳の長谷波さんにとって当面の課題は働きを通じた生活と子どもの教育です。都会ほどの賃金も働く場所も限られている田舎であっても、工夫さえすれば何とか人並みな暮らしはできるようです。また田舎の豊かな自然に生まれた温かい人間関係は、子育てにとって大きな支えになるようです。

田舎は地域のコミュニティを支えるため、みんなで役割を分担しなければなりません。簡易水道の水当番も周辺道路の草を刈る道普請も集落を守る大切な仕事です。都会の暮らしでは金さえ出せばそんな細々などやる必要はありませんが、田舎ではこれを田舎のエゴだと拒否したり、汗をかくことを嫌がっているは生きに行けないのです。長谷波さんは移住以

来PTA活動は勿論のこと、ほたる保存会にも入会して活動しています。

長谷波さんの将来の夢は自分の調理の腕を生かして、できることならこの地で民家を手に入れ、民宿をやることだそうです。そのため地元の長老にお願いして田圃の世話をしたり、野菜の作り方を教わったりしていますが、自分と奥さんと子どもと集落と町という横軸と、自分の人生という縦軸をしっかりと見つめながら、これからもしっかりと生きて行くこととしよう。長谷波さんはじめ六家族に空き家情報を伝えたり、空き家を貸してくれた勇氣ある人の存在を忘れてはなりません。「子どもたちのため」「自分たちの人生のため」に移住を決意した、長谷波さんたちのこれからの人生に大きな拍手を送ります。

「近頃は『移住』二文字 頻繁にあちらこちらで 聞くようなりて」
「もし移住 ないと学校 成り立たぬよそ者神様 仏様かも」
「何よりも 嬉しいことは 子が笑う声 聞くこえる 通学の路」
「子のために 自分の人生 かけようと決心するは 親の鏡だ」
(若松進一 笑売啖呵より)